石ノ森章太郎氏の伝記を見て

伊藤　眞作

私は、石ノ森章太郎氏と、県立佐沼高校美術部で、１年間、思い出深い青春を謳歌しました。だからドラマ
「ヒーローを作った男　石ノ森章太郎物語----亡き姉と仮面ライダー」
には、いろいろなことが思い出され、とても懐かしく鑑賞させていただきました。

①　プロローグ

中学生の時、私の漫画が雑誌に掲載され、稿料をもらっていたので、高校受験よりも、漫画家の小野寺松風氏に弟子入りすることばかり考えていた。母はそんな私に手を焼き、ついに担任の先生を自宅に連れてきた。

「ただ、受けるだけでいいんだ」

と言い包められた。

つまり騙されたのだった。

②　石ノ森章太郎氏との出会い

入試の結果は３番だった。嬉しくもなかった。

おだてられて高校に入ってみれば、暗記暗記の毎日だった。

そんなある日、３年１組に、プロの漫画家になっていた石ノ森章太郎氏のいることを知り、忘れもしない昭和３０年５月２２日午後３時、ニキビ面の石ノ森章太郎氏と会えた。

私の漫画は、根本から直された。

「漫画家になるのなら、このぐらいは描かないと」

と示した指は３本とも大きなペンダコがあった。

③　美術部の毎日

１年生の部員は私だけだった。その日から高校は「廃スクール」ではなくなった。

暗記も「漫画の為」と思えば楽しかった。

先輩の部員の腕は確かだった。殊に、石ノ森章太郎氏はギコチナイ私に、手取り足取りで暇を惜しまなかった。私も、いろんなテクニ

ックを覚えていった。
　木炭デッサンの時は、間違った線を消すのに、コッペパンを用いるので、腹が減った時には便利だった。
　母から
　「哲学の本を読むと、自殺する」
　と禁止されたので反発した私は、フロイトの
　『夢判断』
　を入学の日に，図書館から借りていた。面白かったので、フロイト全集を夏休み前に読み終えてしまった。
　「人間は、何故笑うのか？」
　これが、私の最大の疑問だった。
　笑う動物は、人間のみだ。笑いにもいろいろあって、微笑、苦笑、微苦笑、哄笑-------などたくさんあってキリがない。
　そんなにこだわったのは、理由は私の家の家庭事情にあった。ある事件で、険悪の極みにあったので、「三木トリロー」の笑いの世界に没頭してしまっていた。
中３には、漫画と落語を発表していた。
　話は、何故笑うかにもどる。
　私は、フロイトだった。
　石ノ森章太郎氏は、カントだった。そして言った。
「伊藤君は、漫画家になるより勉強したほうがいいよ」
と。
「笑い」は、未だもって、よくわからない。

④　発表会

　それは押すな押すなの大盛況だった。
特に、目玉の石ノ森章太郎氏の漫画の前では、身動きすらできなかった。
ようやくのことで見入ると、原寸の１．３倍のケント紙上に描かれた漫画は、あたかも印刷されたばかりのように墨痕鮮やかで、アミ目指定のブルーが印象的だった。
　中でも、八千草薫の似顔絵には、びっくりさせられた。なぜなら、かの有名な近藤日出造氏も手を焼いていたのだから。
彼女は、宮本武蔵の愛人「お通」の役で知られていた。

⑤　石ノ森章太郎氏のその他

　石ノ森章太郎氏は文才にも恵まれていた。

「僕は、漫画家にはなるつもりはないよ。できれば日大芸術学学部へ進み、好きな小説でも書き、やるとしたら時々、大人漫画を投稿するだけだね」

と。

　それは、傑作「世界まんがる記」の存在からも自明である。

　後日、ＴＶドラマ「ＨＯＴＥＬ」を、手掛けたのだった。

　また、「佐沼高校文芸コンクール」で石ノ森章太郎氏の作品が特別賞に輝き、昼休みの全校放送に、一斉に聞き入った。

それは、石ノ森章太郎氏の彼女に対する切々たる赤裸々な胸を掻き毟る思いを、全員にとどけたものだった。

　それは、思いを寄せる女子学生たちにとっては赤面させるに十分だったろう。

美術部の中に、石ノ森章太郎氏を慕う女子学生は、ミス佐高の S さん、社会科の先生の長女 O さん、美大へ進んだ M さん。

しかし、嫉妬など一切なかったのは、石ノ森章太郎氏の人格のなせる業であろう。

⑥　送別会

　長いようで短かった一年も終わった。

美術部にもついにその時が来た。

　副部長が送辞を述べた。

石ノ森章太郎氏は部長の立場からの謝辞を述べた。

かくし芸に入った。

Ｓさんは、(^^♪ガード下の靴みがき)

T さんは(^^♪高原の宿)

私は(^^♪雪の降る町を)

　などをうたった。

　石ノ森章太郎氏は、王維の七言絶句

　「送元二使安西」の白文を、黙って寄せ書きの中に、書き連ねていた。

⑦　卒業式

　ついにその日は来た。

宮城県は、昨夜、大雪だった。
式も終わるころ、体育館に降り積もったそれらは、日差しに一斉に溶け出し、ザアザアと響きわたり、、耳を覆いたくさえなった。
校門に立って、卒業生を最後まで見送ったが、その中に石ノ森章太郎氏の姿はみられなかった。
太陽はギラギラ輝き、孤独におびえる私の内面をアザ笑うかのごとし、であった。

私は、石ノ森章太郎氏の予言どうり、数学の道へと進路を取りました。
今ではモダンジャズを耳に、数学・哲学・美術などに関するとりとめのない雑文を書いている毎日です、八十歳近い私は、シルバーセンターのカラオケで、昔、送別会の夕べにうたったメロディーをリクエストしては、往事をしのんでおります。
石ノ森章太郎氏のセリフもよかった。石ノ森章太郎氏は逝ったが、まだこうして私を現に励ましてくれるのです。
「石ノ森章太郎さん、有難うございました」
関係者の皆様に、心からのお礼を申しあげながら、文をとじさせて頂きます。

（２０１８，０９，２８）